

## 子ども時代の組織キャンプ経験に関する自伝的記憶： ライフストーリーインタビューからの質的検討

佐藤 冬果<sup>1)</sup> 井村 仁<sup>2)</sup>

### Autobiographical Memories of Organized Camp During Childhood: Narratives About Participants' Camp Experience and Life Story

Fuyuka SATO<sup>1)</sup> Hitoshi IMURA<sup>2)</sup>

The study aims to elucidate the lasting impacts of organized camp on participants as they reached their adulthood through the viewpoint of autobiographical memory and autobiographical reasoning. Qualitative data were collected by semi-structured interviews with three male and four female research subjects (20 to 40-years age) who had participated in an organized camp during their childhood. Interpretative Phenomenological Analysis (IPA) was used to analyze these seven case studies of organized camp experience. Through the IPA, 14 themes emerged which were categorized into two major domains. Domain of “impact on oneself” including seven themes; “core of self,” “conception of nature,” “relationship to others,” “acquisition of sociability,” “improving confidence,” “interest and skill about outdoor education or outdoor activity,” “vitality,” and domain of “factor of impact on oneself” including seven themes; “camper and adult staff,” “enjoyment,” “unusual situation,” “experience of severe situations,” “continuous participations,” “successful experience,” and “motivation for camp”. Results revealed that the duration of evaluation by participants about camp’s significance is not confined within the immediate time frame of the occurrence. The camp’s significance is reevaluated at different stages of one’s life. This could be during the time when one goes to camp again, or when one is trying to figure out one’s occupation, or even when one is facing an obstacle. Further, our analysis suggests that at each stage, the camp’s experience is reassessed by the individuals and held a new meaning to them. This study confirms that the meaning-making process and lifelong benefits of camp experience during childhood to adulthood.

**Key words :** organized camp, autobiographical memory ,autobiographical reasoning,  
lasting impact, life-story

#### 1. 序論

人が過去に経験した出来事の記憶は「自伝的記憶」と呼ばれる<sup>1)</sup>。人は記憶を単に想起するだけでなく、想起された出来事を解釈・評価

したり、過去の記憶を互いに結び付けたり、過去の記憶と現在の自己を結び付けたりする。こうした内省的な思考過程である「自伝的推論」は、人生における様々な経験と自己をつな

1) 筑波大学大学院 大学体育スポーツ高度化共同専攻  
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1

2) 筑波大学体育系  
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1

1) *Joint Doctoral Program in Advanced Physical Education and Sports for Higher Education, University of Tsukuba*

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki (305-8574)

2) *Faculty of Health and Sport Science, University of Tsukuba*

1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki (305-8574)

ぎ合わせる役割を果たし、まとまりのあるライフストーリーの生成に不可欠なプロセスであるとされる<sup>2)</sup>。自伝的推論は加齢に伴って<sup>1)</sup>、また主要なライフイベントやトラウマ体験<sup>3)</sup>によって活発化することが明らかにされている。

現在、子どもを対象とした組織キャンプ(以下、キャンプ)が各地で行われ、キャンプ後の子ども達は、キャンプで経験した様々な出来事の思い出を記憶として持ち帰っている。その記憶を一度も思い出さず忘れてしまうようなことがない限り、参加者がその後の人生の過程で何かしらの出来事を契機にキャンプの記憶を想起し、想起時点の自己や、新たに経験した出来事の記憶とキャンプの記憶を結びつけて何らかの自伝的推論を行い、時を経てキャンプの「記憶」から影響を受けている可能性は十分に考えられる。

しかし、キャンプが参加者に与える影響に関する研究は、これまでキャンプ前後の参加者の変化を数量的に比較し、キャンプの短期的な効果を捉える手法が主流であった。新保<sup>4)</sup>は、自然体験や生活体験などの「体験」の重要性に触れた上で、その体験が後々に何らかの意味を持つ「原体験」であることが求められると指摘し、「原体験という『基盤』が、どのような機序(メカニズム)をもって、後々の我々の『思想形成』にまで影響を及ぼすのかについて考えることは、原体験の持つ意義・意味、あるいはその必要性を再確認する上で重要(p.138)」であると述べている。加えて、中込<sup>5)</sup>は『『体験学習』や『自然体験』の意義を強く叫ぶ割には、それらの後年に及ぼす影響の機序の説明は十分とは言えない(p.95)」という新保の主張をもとに、子ども時代の原体験の自己展開性を明らかにする研究の必要性を指摘している。

キャンプ終了後、年月が経過した後の長期的な影響に着目した研究は、国内では不登校児を対象としたキャンプ<sup>6,7)</sup>や主に20代以上

を対象とした冒険プログラム<sup>8,9)</sup>、あるいは山村留学経験者<sup>10)</sup>などを対象に行われてきた。キャンプ後2~6年が経過した参加者へのインタビュー調査から、キャンプ経験が不登校児の社会適応に短期的、長期的に影響を及ぼしていること<sup>6)</sup>や、過去17年間の参加者を対象としたアンケート調査から、冒険プログラムによる「自信の獲得」がその後の人生に影響を与えていたこと<sup>8)</sup>、山村留学終了後1~20年以上経過した参加者へのインタビュー調査から、経験の意義が終了直後よりも10年程度経過してから表れていたこと<sup>10)</sup>が明らかにされている。

海外では、Snider & Farmer<sup>11)</sup>が8~13歳で初めてキャンプに参加し、その後スタッフとしての参加も経験した現在30~60代の参加者12名に対するインタビュー調査から、彼らが大人になる上でキャンプ経験から受けた影響として①自信と自立心の向上、②野外への親近感、③ライフスキル、④ポジティブな関係性の4テーマを示している。また、Liddicoat<sup>12)</sup>が小学5年生を対象とした宿泊型環境教育プログラムに参加経験をもつ成人および10代の青年99名にインタビュー調査を行い、「アクティブな出来事」、「達成体験に繋がる出来事」、「対人関係を含む出来事」等の記憶が特に保持され、それらの記憶はBluck<sup>13)</sup>が自伝的記憶の持つ3つの機能として提唱した「自己機能」、「社会機能」、「方向づけ機能」を発揮していたことを明らかにしている。また、Cummings<sup>14)</sup>が冒険教育プログラムに参加後2年が経過した10~50代を対象に、そしてGass et al.<sup>15)</sup>が大学の新生オリエンテーションとして行われた冒険教育プログラムに参加し17年が経過した16名を対象に調査を行っており、どちらにおいてもキャンプ直後に認められた成果はその後の生活に転換され、長期的な影響を残していたことが示されている。しかし、国内外を問わず、野外教育プログラムが参加者に与える長期的な影響を検

討した研究の少なさが指摘されており(6,8,9,11,12,14,15)、子どもを対象としたキャンプが参加後 10 年以上経過した参加者に与える長期的な影響の詳細やその機序は、未だ不透明なままであると言える。

そこで本研究では、子ども時代のキャンプ経験から強く影響を受けたと意味づけている参加者の事例を取り上げ、子ども時代のキャンプ経験が参加者に与える長期的な影響を自伝的推論の観点から明らかにすることを目的とした。キャンプ参加から年月が経過した後に顕在化する、あるいは認識される影響やそこに至る機序は、キャンプに参加した背景や、キャンプ中の体験、その後の人生経験などの参加者それぞれに異なる個人特有のストーリーに深く関連する。そのため本研究では、子ども時代の組織キャンプに関する自伝的記憶に関して、キャンプ前後から現在に至るまでのライフストーリーと自伝的推論の関連、および自伝的推論の内容を質的に検討し、そこに共通するテーマからキャンプの長期的な影響について考察を行うこととした。

## 2. 方法

### 2.1. 事前調査

幼稚園から高校時代の間組織キャンプへの参加経験をもつ 19 歳以上を対象に「キャンプの記憶に関するアンケート」を用いた調査を行った<sup>16)</sup>。回答は主に機縁法で依頼され、インターネット上で回答可能なアンケートフォームの形で公開された。調査内容は①フェイス項目、②キャンプ参加歴、③キャンプに関する自伝的記憶(自由記述)、④キャンプの記憶の記憶特性(19 項目 7 件法)、⑤キャンプの記憶に関する自伝的推論(自由記述)であり、2016 年 7 月～9 月の期間で 191 件(19-25 歳 89 名、26-35 歳 62 名、36 歳以上 40 名)の有効回答が収集された。自伝的記憶や自伝的推論の内容に関する自由記述データを KJ 法によりカテゴリー化した結果、最も印象的な出

来事としてキャンプファイヤー(41 名)や登山(27 名)、仲間との関わり(41 名)や指導者との関わり(29 名)、自然体験(36 名)の記憶が多く収集された。また記憶特性質問項目のうち、自伝的推論に関わる質問 6 項目の平均点(1～7 点)を、出来事の内容ごとに先行研究に倣い評価中間値(4.0)との 1 標本 t 検定<sup>17)</sup>を行ったところ、指導者との関わりの記憶( $M=4.94$ ,  $SD=1.25$ ,  $t(28)=4.06$ ,  $p<.001$ )や登山( $M=4.90$ ,  $SD=1.54$ ,  $t(26)=3.06$ ,  $p<.01$ )、達成体験( $M=5.28$ ,  $SD=0.75$ ,  $t(15)=6.78$ ,  $p<.001$ )の記憶は特に高い自伝的推論得点を示し、現在の自分にとって重要な記憶だと評価されていたことが明らかになった。

### 2.2. 調査対象の抽出

上記のアンケート回答者のうち、追加調査への同意を得られた者から、以下の条件を考慮し抽出した 7 名に対し 2016 年 10～11 月の期間にインタビュー調査を行った。第 1 に、自伝的推論は加齢に伴い活発化する<sup>18)</sup>という知見を考慮し、アンケート調査の分析で用いた 3 つの年代区分において、それぞれ男女 1 名ずつ以上がインタビュー調査の対象になるようにした。また、アンケート回答においてキャンプの記憶に関する自伝的推論が進んでいることを伺わせる記述がなされていることを考慮した。7 名の内訳は男性 3 名、女性 4 名、19-25 歳 2 名、26-35 歳 3 名、36 歳以上 2 名であった(表 1)。

### 2.3. 調査内容

先行研究<sup>6,12,18)</sup>を参考にインタビューガイドを作成し、ライフストーリー、キャンプ経験に関する自伝的記憶(最も印象に残る出来事の詳細やキャンプ経験全体の記憶)、および自伝的推論(最も印象に残る出来事およびキャンプ経験全体から受けた影響や自己の変化)について、個別に半構造化インタビューを行った。所要時間は 1 名につき 1 時間 15 分から 2 時間 30 分であった(表 1)。

表-1. インタビュー調査協力者の概要

	事例A	事例B	事例C	事例D	事例E	事例F	事例G	
年齢	27歳	24歳	30歳	27歳	38歳	24歳	42歳	
性別	女性	男性	男性	女性	女性	女性	男性	
職業	教員	大学生	会社員	教員	会社員	会社員	会社員	
婚姻関係	未婚	未婚	未婚	未婚	既婚	未婚	未婚	
最も記憶に残っている出来事	内容	指導者・友人との別れ	友人との夜の語り	荒天の中歩いた登山	ボンファイヤーでのホームシック	十数時間歩いた登山	迷子になったナイトハイク	ソロビバーク
	経験学年	小学校1年生	小学校6年生	中学校3年生	小学校6年生	小学校5年生	小学校4年生	小学校5年生
	経過年数	20年	12年	14年	15年	27年	14年	31年
インタビュー調査実施場所	筆者自宅	カフェ	カフェ	カフェ	インターネット通話	カフェ	インターネット通話	
インタビュー時間	1時間55分	1時間15分	1時間30分	1時間30分	2時間	2時間30分	1時間45分	
テキストデータ	約24,000字	約20,700字	約27,200字	約21,800字	約29,900字	約35,300字	約22,600字	

## 2.4.調査方法

インタビュー調査には直接面会やインターネット通話を用いた。調査協力者には事前に質問内容や倫理的配慮についての説明を行った。インタビュー内容は調査協力者の同意のもとでICレコーダーによる録音を行い、1名につきおよそ2万字から3万5千字程度のテキストデータが得られた(表1)。

## 2.5.分析方法

### 2.5.1.解釈的現象学的分析(IPA)

インタビュー調査により得られたテキストデータの分析には、解釈的現象学的分析(Interpretative Phenomenological Analysis ; IPA)を採用した。IPAは、「人が彼らの個人的世界、および社会的世界をどのように意味づけるかを詳細に探索すること(p.53)」<sup>19)</sup>を目的とし、特定の現象(出来事や過程)とその人の関係や関わり方を明らかにすることに適した、現象学、解釈学、個性記述学(イディオグラフィー)を理論的支柱にした質的研究法である<sup>20)</sup>。IPAは現象学的哲学の創始者エトムント・フッサールの基本精神“事象そのものへの還帰”のもとで、『人間の生きられた経験』を予め定義づけられたカテゴリー体系に従ってではなく、それ自身の言葉で可能な限り表現(p.169)<sup>20)</sup>される方法であり、近年「現代イギリスの心理学者の間で最も幅広く知られている現象学的心理学アプローチ(p.149)」<sup>21)</sup>と言われるな

ど、心理学分野で発展してきている。IPAの利点は「研究者がテーマを定義づけ徐々に統合できるような、明確で体系的なガイドラインが存在し…研究している現象の本質をとらえたマスターテーマの表が得られる(p.131)」<sup>22)</sup>ことであり、Kyriakopoulos<sup>23)</sup>が大学生を対象としたアドベンチャーセラピープログラム(AT)の参加者6名に対してインタビュー調査を行い、AT経験の意味を4群12テーマに集約したり、Gillard & Allsop<sup>24)</sup>が重病を患う青年24名を対象に、彼らにとってのサマーキャンプ経験の意味を8テーマに集約するなど、海外では野外教育関連の研究にもIPAが利用されている<sup>23,24,25)</sup>。

### 2.5.2.IPAの手法とグラウンデッド・セオリー・アプローチとの関連

IPAは、野外教育研究で用いられる質的データ分析手法のなかでも今日の主流ともいえるグラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)の方法論に非常に近く、親和性があると言われている<sup>20,21,26)</sup>。IPAは「話者の語った経験の①顕在的意味が明確になるように促し、また②潜在的な隠された意味を解釈して顕在化し、③話者と聞き手たる研究者本人、さらには報告書の読者に理解できるようにする分析方法(p.170)」<sup>20)</sup>で、テキストに対する作業によってテーマやカテゴリーを定義し、それらを統合して高次のユニットを生成する点



表-2. IPA 分析の手順  
(ラングドリッジ(2016, p. 153-154), 伊賀(2014, p. 177-181)を基に作成)

①	トランスクリプトを何度も読み返し、インタビューの全体構造、また特定の部分がつながり合わされてどのような物語が構成されているのかを読み取る。同時に、特定箇所の意味(興味深い点、話者にとって重要な事象、特殊な言語使用、分析者の概念的解釈など)について左側の余白にコメントを記入する。全般的にテキストに内在する意味にとどまりつつ、解釈的な見解を付すことは少なめにしながら、テキストにおいて生じていることをただ記述する。
②	コメントの細部を縮約し、コメント間の相互関係や結びつき、そしてパターンを発見することで現れてきたテーマを右側の余白に記入する。最初の書き込み、テキストの特定箇所に含まれる幅広いレベルの意味を反映して、より意味深い言明へと変換される。この段階でのコメントは、より広く、理論的にもより意義のある関心を反映する。
③	テーマを紙の上で1つずつ並べ、テーマ間に共通のつながりを見出し、より分析的にまたは理論的にそれらを整理することを試みる。まとめるテーマもあれば、さらに分割が必要なテーマ、他を包摂するより上位のテーマとして現れるテーマもある。浮上した全てのテーマが用いられるのではなく、リサーチ・クエスチョンに照らして関連性のあるテーマを絞り込む。
④	一貫した秩序のあるテーマ表を作成する。諸テーマを的確に名づけ、それぞれのテーマは、特定箇所の引用を通じて元のテキストと結びつけておく。
⑤	以上の段階を1事例で遂行したら次の事例に進む。その研究で扱う全事例を表現する最終的なテーマ表が完成するまで、この手順を事例ごとに繰り返す。諸事例で分析されたテーマ結合の表を相互に見比べ、それらの中で最も卓越したテーマは何か、また事例横断的に共通してみられるテーマ結合は何かを発見する。そして一連の大きなテーマ、必要に応じてサブテーマを提示しつつ所見を述べる。

で GTA と共通であるが、IPA は「トランスクリプトの行ごとのコーディングや意味単位ごとのコーディングは行わず、分析者の観点で自由なテキスト分析を行う(p.178)」<sup>20)</sup>ことが特徴である(表 2)。GTA は「現象を説明する文脈化された社会的プロセスを明らかにすることを目的(p.93)」<sup>26)</sup>としてきたことに対して、IPA は個人の参加者の心理的世界を洞察するためにデザインされており、現象の性質や本質を理解することに向いている<sup>26)</sup>とされ、本研究により適していると考えられる。

### 2.5.3. 妥当性・信頼性の確保

妥当性・信頼性を担保するため、分析の過程で野外教育分野の質的研究に知見をもつ大学教員や研究員からのスーパーバイズを受けること(Triangulation)、インタビュー調査協力者へ分析内容の確認を行うこと(Member check)、必要に応じて情報の公開を行うこと(Audit trail)の3つの手続きを行った。

## 3. 結果と考察

本稿では、自伝的推論の過程や記憶のもつ機能が特徴的な3名を抜粋し、事例を提示する。はじめに、想起時点の自己と自伝的推論との関連が特徴的なAの事例を示す。そして「きわめて重要で、自己認識に影響を及ぼしたり、

その後の考え方や行動に影響を及ぼす出来事(p.137)」<sup>1)</sup>の記憶とされる「個人的出来事記憶」の特徴をもつ事例(A,C)の中からその特徴を強く示すCの事例を提示し、「自己定義記憶」の特徴をもつ事例(B,D,E,G)の中から、その特徴を強く示すEの事例を提示する。その後、その他の事例の概略を提示したのち全7事例を統合したIPAの結果を示す。なお、事例の記述において、「」は本人の語り、『』は語りの中に含まれる発言、「…」は語りの省略、( )は筆者による補足説明である。

### 3.1. 事例の検討

#### 3.1.1. Aの事例

##### 1) Aのライフストーリー

Aは現在27歳の女性で、教育熱心な両親の第二子として生まれた。Aは小学校1年生の時、図工の授業で自由に絵を描く課題に対して、その「自由が分からなかった」、「いいアイデアが浮かばなくて…出来ない！って思った」ことをきっかけに、通学を渋るようになった。そのような中、Aは「友達に物を盗られちゃったりとか、友達の家に行ったらベランダに追い出されたり」という経験をした。民間団体主催のサマーキャンプ(小学校1年生夏)とスキーキャンプ(小学校2年生冬)に、自らの意思で参加したのはその頃であった。その後クラ

ス替えなどを契機に友人関係も変化し、新たな友人と共に、残りの小学校生活を休むことなく過ごした。その後、実家を離れ寮生活を体験したり、海外生活を体験したりと、積極的に身を置く環境を変えてきた点が、A のライフストーリーの一つの特徴であると言える。現在は高校時代から志した分野の教員として、日々を過ごしている。

### 2) A のキャンプに関する自伝的記憶

A にとって最も印象に残っている出来事は、20 年前、小学校 1 年生で参加したサマーキャンプの帰りのバスの中で担当カウンセラーであった T(女性)との別れを惜しむ場面であった。A は、T が班員の名前を覚える為に全員の似顔絵を描いてくれたこと、キャンプ最終日に T から手紙を貰ったことなど、T に関するエピソードを多く語った上で、当時の状況を次のように振り返った。

「小 1 の時のキャンプの帰りに、バスで帰ってて、すごい寂しくなって。T ちゃんと一緒に座ってて、あ、なんかお別れなんだっていうのが本当に寂しくて、泣いたの。みんなで T ちゃんにぎゅーって、『行きたくないよ〜』って言うてるのが一番記憶に残ってる」

「(帰りのバスは)一番楽しかった〜！が凝縮されてた瞬間だと思うんだよね。…小学校で色々あって、だから…(キャンプは)全く関係ない、私を知らない子たちだから、それもあって楽しかったんだと思う」

### 3) A のキャンプに関する自伝的推論

参加当時の A にとって、キャンプは居づらさを感じていた学校のコミュニティの外に出て、親しみやすいカウンセラーや初対面の班員という新しい人間関係の中で、本来の自分を再確認する「外の世界」としての意味を持っていたことが語られた。そして、カウンセラーに守られた感覚の中でのびのびと過ごし、数日間の関わりでも仲の良い友人を得たという

成功体験は、人間関係構築に関する自信へと繋がっていたと A は振り返った。そして、キャンプの経験が「(外に)出たら何かあるとは常に思ってる。マイナスの意味じゃなくて、プラスに」という現在の A の考え方を形成した基盤の一つとして捉えられており、その後の人生で「外の世界」へ向かう原動力の一部となって影響を与えていたことが語られた。

そして、教員となった現在「T ちゃんの一生懸命なところは、(今に)すごい繋がる気がしてるんだよ。名前を覚えようとしてくれたっていうのは、今、職業柄、教育実習生とか見ても…『そこから始まるんだよ』って言うてるのは多分そこなんだよね」と語るなど、教員として相手に積極的な関心を寄せることを重視する姿勢は、当時のカウンセラー T の姿勢からの影響であると言える。このように、現在の A にとってキャンプの記憶は、ロールモデルの記憶としての意味を持っていた。人は「現在置かれている立場から過去の経験をとらえ直し、意味づけようとする(p.156)」<sup>1)</sup>と言われる。そのように、キャンプの記憶は、A 自身の状況や社会的な立場によってその意味を変えながら、随所で A へと影響を与え続けていると言える。

### 3.1.2. C の事例

#### 1) C のライフストーリー

C は、両親のもとに 3 人兄弟の長男として生まれた。近所の田畑でよく遊ぶ活発な子どもであったが、中学 2 年生で教員や友人からのいじめを受けた C は不登校となり、「専門の病院と自分の家での生活」で「徐々に自己肯定感が下がって」いく状態となった。そのような中、中学校 3 年生で C は不登校児を対象とした通年型キャンプに参加した。複数回の短期キャンプを経て迎えた夏のキャンプでの登山を、C は最も印象に残っている出来事として記憶している。このキャンプ経験をきっかけに高校受験に取り組み、希望した高校に入学した後は学校を休むことなく過ごした。

また、Cは高校2年生で同キャンプにスタッフとして参加し、2年前に自らが苦戦した登山と全く同じコースを「発達に課題があるお子さん」のサポートをしながら歩く経験をした。この経験をきっかけに「自分が経験したことを生かせるのはそういう仕事」と感じたCは、福祉系の大学に進学し、現在は教育関連の職に就いている。

### 2) Cのキャンプに関する自伝的記憶

Cにとって最も印象に残っている出来事は、14年前、中学3年生で経験した1泊2日の登山であった。その場面について、Cは次のように語った。

「すごく過酷な登山だったのをすごく覚えていて。1日目の夕方からもう真っ暗になって、雨が降ってきて。すごく寒くて。…山の中を、ほんとに登ったり下ったりして…自分が発狂しそうな位、なんでこんな所連れてきたのと…ほんとに苦痛で苦痛で苦痛で苦痛でたまらなくて。周りの子たちも疲弊して。で…夏の8月の時期だったんだけど、寒くて手が震えてきちゃって。…これはもう生きるか死ぬかだなんていう経験をしたのが、多分初めてだったのかな。いっぱい蚊には刺されるわ、次ご飯作りましょう、ってなっても薪が濡れてて…それでももう本当に生きた心地がなくて、でもそこで一晩過ごさなきゃいけないっていう状況…っていうのは今でも鮮明に覚えてる」

### 3) Cのキャンプに関する自伝的推論

Cは、キャンプ経験による影響として「自信の獲得」を第一に挙げた。その中には「登山をすることで、1年間丈夫な体で生活することができるって…それがなんかすごく自信になった」という身体の丈夫さへの自信や、火おこし等の技術を褒められたことや不便な自然の中の生活で「こうすればいいんだ、っていうアイデアが出てきた成功体験」によって得た野外活動技術への自信、そして「今まででき

なかったことができる」という自分自身への自信が含まれていた。その他、Cは「自分をよく知ることができた。今まで自分を中心に…見てたのが、自分というのが本当にちっちゃくなって、その周りに世界があるんだなって、そういう見方が変わった」というような自己理解の促進や視野の広がりなどの様々な影響を挙げ、それらは「後になってから、3年4年5年経ってから気づくようになってきた」と語られた。加えてCは、再び同じ登山コースをスタッフとして子どものサポートをしながら歩いたことが「大学の専攻を決めるきっかけにもなった」と語った。大学での専攻、ひいては現在の職業選択に至るまでの登山に関わるストーリーの繋がりが、現在のCと過去の登山の記憶を強く結び付け、登山の記憶が自己形成に深く関わる重要な記憶として認識されていることが伺えた。

また、Cはキャンプに参加したことが、自身が大きく変化する「ターニングポイントだった」と語った。Pillemer<sup>27)</sup>は、一回だけの出来事の記憶でも重要な機能を担うことに着目し、「特定の時間・場所で経験した出来事の記憶で、その状況の詳しい説明や感覚印象を含み、『確かに経験した』という確信を伴う記憶(p.84)」<sup>1)</sup>を「個人的出来事記憶」と名づけ、個人的出来事記憶が発揮する「出発点」「転換点」「基準点」「類推」という4つの機能を提唱した。Cにとっての初めての登山は、「それまでの自分の信念や態度、自分が歩んできた道筋を変更するきっかけとなった出来事の記憶(p.84)」<sup>1)</sup>と言われる「転換点」の機能を持つ個人的出来事記憶として保持されていると考えられる。また、人は出来事が生じた瞬間にその出来事を転機として認識するのではなく、その後生じた出来事や、その後の自己と結びつけることで、「あの出来事が転機だった」と認識すると言われ、「転機となった出来事そのものではなく、それを転機として認識することが、自己を成長させる(p.191)」<sup>1)</sup>とされる。

Cにとって、中学校3年生で経験したキャンプは、参加直後のCに様々な影響を与えただけでなく、年月が経過し、Cが「キャンプがターニングポイントだった」と認識してからも、Cに影響を与えてきた記憶であると言えるだろう。

### 3.1.3. Eの事例

#### 1) Eのライフストーリー

Eは現在、会社員として働く38歳の女性である。両親と妹との4人家族で育ったEは、幼稚園年長の夏に初めてキャンプに参加して以来、高校卒業まで毎年参加した。小学5年生の時に、後に最も印象に残る出来事となる「道なき道を16時間も彷徨う」というアクシデントが起きた登山を経験した。中学校時代は部活動に熱中したが、その中でキャンプの記憶を想起した経験を次のように振り返った。

「(部活の)チームメイトに、...十何時間彷徨った登山を一緒にした子がいて。夏の練習の時...お水を飲ませてもらえない、スパルタの先生で。その時に『あの登山、乗り越えられたんだから、これも乗り越えられるよ!』みたいな励まし合いをしました。それはすごく大きい...具体的にキャンプの経験を持ち出して『あれが出来たんだから、何でもできる!』って言って...それが中学の思い出に残る一幕です」

その後高校に進学すると、キャンプ以外は勉強一色という3年間を過ごした。その後、小学校から興味を持ち続けた分野に進学、就職し、多忙な日々を過ごした。結婚を機に職場を変え、現在は夫、2人の子どもとともに「仕事と子育てを夫婦で協力して」行いながら過ごしている。

#### 2) Eのキャンプに関する自伝的記憶

Eにとって最も印象に残っている出来事は、27年前、小学5年生で経験した登山での道迷いであった。その場面について、Eは以下のように語った。

「先頭の方のグループが迷ったんじゃないかな。で、...下りていくってことを目標に、登山道ではなく...道が全くない状態のところを、夜中までかけて、16時間かな、歩き続けたの。開けてるところもないから、休憩とかもその場で休憩するだけなんだけど、登ったり下りたり、大変だったんですよ。ホント長くて。...最終的に、温泉の宿に辿り着いて、広間に全員で入れてもらって、順番にお風呂に入っていて。待ってる間に、...呆然としてた。っていう経験...みんながどこに向かってるか分かってるのかも私達分からなくて、とにかくついて行くしかない。っていう...そんな経験が、一番の印象に残っています」

#### 3) Eのキャンプに関する自伝的推論

Eは過酷な登山を乗り越えたことによって自信を獲得し、それが人生において次に訪れる「もっと大変なこと」を越える支えとなり、その後は新たに乗り越えた困難の記憶がEを支えてきたと振り返った。また、Eは登山を「ストレッチ体験」(心理的にコンフォートゾーンからストレッチゾーンに入る体験)であったと評価したが、それは「大人になってからそういう言葉があることを知って、その言葉がしっくりくる体験だと振り返られたので...それはもう30過ぎてからの話」と語ったように、Eは時間が経過してからその出来事を改めて振り返り、当時は持っていなかった言葉や概念を当てはめ、改めて登山経験を意味づけていた。加えて「子どもができる前は、あれは事故だし、たまたま起きた経験だった...としか思ってなかったんですね。でも子どもが出来て、成長をどう助けていくのかっていうことを考え始めたときに、...ああいう気持ちになれる何かしらの体験っていうのはさせたかって、具体的に思うようになりました」と語り、子育てを通じ、子どもの成長を考えるようになったことが自伝的推論を促進させていた



ことが伺えた。

キャンプ全体を振り返ると、Eにとって子ども時代のキャンプの経験は、「生の自然にどっぷり浸かる」経験であったと語られた。そこで「生きてるのに川に流れていくトンボを見たりとか...助けたらなんか、自然の摂理を乱しちゃうのかなとかっていう疑問」を覚え、「自然とか命とか、人間の存在とか、人間として自然とどう関わっていくか」について思いを巡らせた経験は、その後の人生においても、Eの「価値観の一つみたいなところに残って」いるという。そして幼稚園年長から高校3年生まで継続してキャンプに参加したEにとって、キャンプ経験は「あの経験が無かったら今の私じゃない...今、物事を見る見方も違ったり、自然の見方も違ったり、自分っていうものの捉え方もきっと違ったり、もう、下の、底の、土台のところ、キャンプがずっぽりある」と語られるほどの影響力を持っていた。

このように「その人のアイデンティティと密接に結びついて『私』を象徴する記憶(p.116)」<sup>1)</sup>は Singer & Salovey<sup>28)</sup>により「自己定義記憶」と呼ばれ、過去から今日まで続く関心事や葛藤に関わっている、強い感情を伴って繰り返し鮮明に想起される、などの特徴が指摘されている<sup>29)</sup>。McLean & Fournier<sup>30)</sup>は、自己定義記憶と自己との間に、その出来事が性格や行動特性と関わっている、モラルや善悪判断などの価値観と関わっている、世界に対する

態度と関わっている、自己の成長、強さや自信の獲得と関わっているなどの関係性があることを見出している<sup>2)</sup>。

このように、Eにとってのキャンプの記憶は、人生の様々な局面で想起され、その都度新たな意味が付与されたり、意味づけが深まったりと自伝的推論を深めながら保持されてきた記憶であり、連続参加によって得た複数の記憶がネットワークを形成し、自己定義記憶としてEの人生に長期的な影響を与え続けてきたと言えるだろう。

### 3.1.4. その他の事例

上記の3事例のほか、深夜に友人たちと星を眺めながら語り合った記憶(当時小学6年生)から、友人との人間関係構築に関して、また教育に関しての価値観が醸成されたというB、キャンプ初日夜のボンファイヤーでホームシックになり、カウンセラーに慰めてもらった記憶(当時小学6年生)から、自らもキャンプリーダーを志すようになったというD、林間学校で行ったナイトハイクで道を間違え、迷子になった記憶(当時中学2年生)から、リーダーシップや協調性などの社会性を身につけたというF、そして、初めてのソロビバーク経験の記憶(当時小学5年生)から、日常や人への感謝の気持ちを学び、指導者の言葉から人生の指針を得たというGなど、それぞれの事例において多様な記憶と自伝的推論が語られた。

表-3. 子ども時代の組織キャンプ参加経験の意味  
—7事例から生成された最終テーマ一覧—

1.【自己への影響】	2.【自身への影響の元となったキャンプの要因】
1-1.《自己の核》	2-1.《仲間・指導者の存在》
1-2.《自然観》	2-2.《楽しさ》
1-3.《人とのつながり》	2-3.《非日常の場》
1-4.《社会性の獲得》	2-4.《極限状況の体験》
1-5.《自信の獲得》	2-5.《連続参加》
1-6.《野外教育や野外活動に関する態度・技能》	2-6.《成功体験》
1-7.《行動力》	2-7.《キャンプ前のモチベーション》

表-4. IPA 分析最終テーマと語りの事例(自己への影響)

《テーマ名》 (テーマに関する語りをした人物)	<サブテーマ>
「-語りの事例-」	
1-1. 《自己の核》 (BDEG)	<自分の土台><自己の円の中心><人生の背骨><自分の中の柱>
「(キャンプの経験は)円の中心って言ったらいいかな、円の中心…核にあって、だんだん広がってきけるかな、イメージ的に。だからこう、握って握って握って握って、そこ(キャンプの経験)に行き着く。」(D)	
1-2. 《自然観》 (BCDEF)	<畏敬の念><自然への気づき><環境配慮行動><自然を感じる心><自然に慣れる>
「大学に入ってから、食べ物なり、周りの環境に感謝する人が意外と少ないことにびっくりして、自分はどこでそれを学んだのか(考えると)、…実際に自然の中で川下りして、その自然の怖さとかを知ったり、食べ物で自分たちでとる苦労をしたり、…畏敬の念とか、…そういうものを学ぶきっかけとして、キャンプとか自然体験ですごいできた。」(B)	
1-3. 《人とのつながり》 (BCDG)	<キャンパーとのつながり><スタッフとのつながり>
「キャンプを通して色んな出会いがあって、実際もう、二度と会わないかもしれないんだけど、こんな関わりがあったなとか、全部私の中に記憶に残ってるっていうか…やっぱり、人との繋がりが残るのかな。」(D)	
1-4. 《社会性の獲得》 (BDFG)	<リーダーシップ><チームワーク><対人態度><人と関わる楽しさを知る><人との違いを知る>
「班単位での団体行動。っていうのが、人との関わりを学ぶとか…。逆にソロ活動っていうのは、団体行動っていうのは要はこういうことなんだよっていうことを、…逆に、1人でやることによって、団体とか、人間の集団の中での…関わりを学べたと思う。」(G)	
1-5. 《自信の獲得》 (ABCE)	<身体の丈夫さへの自信><野外活動技術への自信><人間関係への自信><自分自身への自信>
「あれが無かったら、私、全然違う人間になってたかもしれないです。どうやって自信をつけたらいいか、自信がないってことさえも気づかない中で、自信がないことが原因で、もっと違う生活を、ネガティブな意味で、違う人間として、違う生活をしてた気がするの。」(E)	
1-6. 《野外教育や野外活動に関する態度・技能》 (BDEG)	<野外教育への考え方><野外活動の技術>
「今、教育を改めて勉強していると、組織キャンプにしろ、自然体験とかにしろ、そういう知識って、身につけておくと自分がやるときに面白いだろうなって思うから、そういう研究をしている人たちの本とか読んでみたい。」(B)	
1-7. 《行動力》 (CEFG)	<目標への向かい方><やり抜く力><主体的に動く力><やるしかない時の行動力><何とかなる精神><何とかするしかない>
「勉強しようというところで、そもそも、やっぱり友達が主体でなくて自分が主体で動いてた部分があって、それはキャンプの経験がなかったら出来なかった部分だった。」(G) 「泣いても怒ってもわめいても、仕方ない、やるしかない、みたくない、泣いてる時間があったらどうするか考える、みたくない態度は、多分キャンプを通して学んだ。」(E)	

### 3.2. IPA 分析の結果

以上の 7 事例に対して「現在の個人にとって、子ども時代の組織キャンプ経験の意味とは何か」という視点で、解釈的現象学的分析の手法に則り、それぞれの事例についてテーマを抽出した。その後、全ての事例を統合し、全事例を表現する 2 群 14 テーマから成る最終テーマ表を作成した(表 3)。以下、それぞれのテーマについて詳述する。なお、抽出された群を【】、テーマを《》、サブテーマを<>で示す。

#### 3.2.1. 【自己への影響】

【自己への影響】は、キャンプによって自身が受けた影響に関する語りをまとめた上位のテーマで、以下の 7 テーマを含む(表 4)。

##### 1-1) 《自己の核》

《自己の核》は、それぞれの事例においてキャンプが「核」、「土台」、「柱」、「背骨」などと表現された語りから生成されたテーマである。「私の場合は、精神的な成長、子どもの発達の段階に、もうキャンプが入ってしまっていたから、…切っても切り離せないというか、キャンプが背骨の一つみたいな感じで私の人生に

あった」という E の語りにみられるように、このテーマに含まれる語りをした 4 名(B,D,E,G)はキャンプに継続的に参加(4~13 年)したことで、キャンプの記憶がアイデンティティの発達と密接に結びついて保持されていることが伺えた。

##### 1-2) 《自然観》

《自然観》は自然に対する価値観や態度、気づきを得たという語りから生成されたテーマで、自然に「どっぷり浸かる」ことで「人間として自然とどう関わっていくかに考えが及ぶようになった」という E や、学校でのキャンプによって、普段は触れることのない自然に「慣れることが出来た」という F など、それぞれの経験に応じて、自然との関係性に対する意味づけがされていた。

##### 1-3) 《人とのつながり》

《人とのつながり》は、キャンプに参加したことでキャンパーやスタッフとのつながりが出来たことに意味を見出している語りから生成されたテーマである。Snider & Farmer<sup>11)</sup>は子ども時代のキャンプによる影響として、

「仲間同士の関係」と「キャンパーとカウンセラーの関係」という2部構成のテーマ「ポジティブな関係性」を指摘しており、本テーマと同様の意味を持っていた。そこでは生涯の友(life-long friends)の獲得について述べられているが、本研究においてもBやC、E、Gによって10年以上が経過した現在でもキャンプで出会った仲間とつながっていることが重要な意味を持つものとして語られた。加えて、Dによって「キャンプを通して色んな出会いがあって、実際もう二度と会わないかもしれないんだけど、こんな関わりがあったなとか、全部私の中に、記憶に残ってる」と語られるなど、AやDにとっては、キャンプを通して出会った仲間の存在が、現在の交流は無くとも意味を持つものとして語られた。

#### 1-4) 《社会性の獲得》

《社会性の獲得》は「リーダーシップをとる積極性が出てきたのはおそらく、キャンプを経験してからじゃないかな」というG、「人と関わることに恐れが少なくなったのもあると思う。初対面の人たちとやっていかなきゃいけないから」というBの語りなど、社会性や対人態度に関連する語りから抽出されたテーマである。これまでも「人間関係能力(社会性・集団適応力)の向上」はキャンプによる主要な教育効果の一つとして挙げられてきたが<sup>31)</sup>、参加者自身の視点からも、その効果は認知されていた。

#### 1-5) 《自信の獲得》

《自信の獲得》は、キャンプ経験から自分自身や野外活動技術などに対して自信を得たという語りから生成されたテーマである。「あれ(登山)が無かったら、私、全然違う人間になっていたかもしれないです。どうやって自信をつけたらいいか、自信がないってことさえも気づかない中で、自信がないことが原因で、もっと違う生活を…ネガティブな意味で、違う人間として違う生活をしていた気がするの」というEの語りからは、登山をやり遂げ自信

を得たことが、その後の人生を大きく変えたという自伝的推論をしていることが読み取れた。小田ら<sup>6)</sup>や伊原ら<sup>8)</sup>、Snider & Farmer<sup>11)</sup>の研究においても「自信の獲得」がその後の参加者に影響を及ぼしていたことが明らかにされており、キャンプ経験による《自信の獲得》は、キャンプ後の参加者に長期的な影響を与える強固な礎となると言えるだろう。

#### 1-6) 《野外教育や野外活動に関する態度・技能》

《野外教育や野外活動に関する態度・技能》は、キャンプ経験から野外教育や野外活動への興味関心を得た、あるいは野外活動の技術を得たという語りから生成されたテーマで、職業として、野外教育に関連する分野を選択した例も含まれる。野外教育を学んだり、野外活動を実施したりすることは、子ども時代のキャンプの記憶を想起するきっかけにもなっており、自伝的推論を促進させていたことも確認された。

#### 1-7) 《行動力》

《行動力》は、キャンプ経験から<やり抜く力><主体的に動く力>、そして「泣いても怒ってもわめいても仕方ない。やるしかないみたいなの、泣いてる時間があったらどうするか考える、みたいな態度は多分キャンプを通して学んだ」というEの語りに代表される<やるしかない時の行動力>などの《行動力》を得たという語りから生成されたテーマである。自然環境下で行うキャンプは、「自分がやるしかない」という状況に頻繁に遭遇する。このテーマについて語った4名(C,E,F,G)は、登山やナイトハイク、ソロビバークの経験の中でそのような環境に身を置いたことで、自ら目の前の状況に向かう力としての《行動力》を身につけたと、自身の経験を意味づけていた。

#### 3.2.2. 【自身への影響の元となったキャンプの要因】

【自身への影響の元となったキャンプの要因】は、キャンプから受けた影響の要因である

表-5. IPA 分析最終テーマと語りの事例(自身への影響の元となったキャンプの要因)

	《テーマ名》 (テーマに関する語りをした人物) 「語りの事例」	＜サブテーマ＞
2.【自身への影響の元となったキャンプの要因】	2-1. 《仲間・指導者の存在》 (ABCDEFG)	＜仲の良い仲間＞＜見本＞＜認めてくれる存在＞＜ぶつかり合い＞＜一緒に体験＞＜集団生活＞ ＜大人が存在＞＜見守られていること＞＜楽しんでいる大人の姿＞＜大人同士の関係性＞＜複数年参加のきっかけ＞ 「(24時間一緒に居るのは)大きいね。一緒にご飯食べたり、一緒に作らないといけなかったりとかさ、何かを成し遂げないといけないから。」(F) 「カウンセラーとの関係…周りに居ないような、関わることがなかった年齢の人たちと関わることが出来るっていうのも、絶対大切な要素、成長にとって。」(E)
	2-2. 《楽しさ》 (ABDEFG)	サブテーマなし 「(帰りのバスは)一番楽しかった～！が凝縮された瞬間だと思うんだよね。やっている最中ももちろん楽しんだけど、…ほんとにこれは楽しかったぞって。」(A) 「自分の家から、青年の家まで、グループで…自分達の手だけで行け、みたいな。…楽しかった。」(F)
	2-3. 《非日常の場》 (ABCDEFG)	＜学校外の世界＞＜自然環境下での活動＞ 「基本はやっぱり学校とか幼稚園とかっていう単位があって、その外、っていうのが私の中ですごい強くて、キャンプに参加するっていうことの意味は。」(A) 「(学校外の友人が)居るんだよ、っていうのがすごい嬉しかったかなあ。…私にはどこどこ市に友達がいるんだよ、みたいな、ちょっと自慢じゃないけど。」(D)
	2-4. 《極限状況の体験》 (CEFG)	＜生死の境を感じる体験＞＜逃げ場がない状況＞＜ストレッチ体験＞＜制限された環境＞ 「自然の中でソロ活動、…当時の自分にとっては、極限の状況下に置かれて、ある意味スパルタだよ、そういうところで、そういう極限のところで極限のことを学べるっていうのは、すごくキャンプに参加する意義っていうのはあるんじゃないかな。」(G)
	2-5. 《連続参加》 (BCEG)	＜年間を通した連続性＞＜再び同じコースを歩く＞＜毎年参加すること＞ 「(自然に対する考え方が)毎年夏になると、広がっていったり、深くなっていったりっていうのを、毎年行くことによって、引き続き考えることが出来た。それに私が成長しているのもあって。」(E)
	2-6. 《成功体験》 (ABCEFG)	＜仲の良い友人をつくれたこと＞＜認められる経験＞＜やり遂げた体験＞＜成功体験＞ 「美味しいご飯をお前のおかげで食べれたよ、と。あなたが居たからこんなに早く設営が出来たよ、と…認められるっていう経験がすごく良かったかなと。今思うと、そういうのが結構自分の中で、変化、気持ちの変化が出てきたかなって。」(C)
	2-7. 《キャンプ前のモチベーション》 (ACDFG)	＜自発的な挑戦＞＜参加前の楽しみな気持ち＞＜自己の成熟によるモチベーションの変化＞ 「自分自身をチャレンジ…いう気持ちで、取り組んだのが一番大きかったかなと。」(C) 「5年生の時にいきなりモチベーションが上がった」(G)「小学校5年生以降のキャンプを経験して、割とそういうリーダーシップっていう部分が、自分の中に出てきたかな。」(G)

と意味づけられたキャンプの要素についての語りをまとめた群で、以下の7テーマを含む(表5)。

### 2-1) 《仲間・指導者の存在》

《仲間・指導者の存在》は、「一期一会の出会いでも、こんな大事な思い出っていうか、仲良くなれるんだっていうのが大きかった」というAの語りにみられるような、キャンプ経験において仲間や指導者の存在、集団生活に意味を見出している語りから生成されたテーマである。＜仲の良い仲間＞の存在だけでなく、＜見本＞となるような年上の参加者の存在や、自らが＜見本＞として振る舞うことが求められる年下の参加者の存在についても語られた。Liddicoat<sup>12)</sup>が対人関係を含む出来事の記憶が特に保持されることを明らかにしたように、キャンプにおいて他者と密接に関わった体験は長く保持され、後に、参加者から大きな意味を持つ体験として認知されやすいと言える。

また、指導者に関しても「周りに居ないような、関わることがなかった年齢の人たちと関

わることが出来るっていうのも、絶対大切な要素」というEの語りに代表される＜大人が存在＞、「大人も楽しんだ。楽しそうな大人を見たって言う方が良いかな」というBの語りに代表される＜楽しんでいる大人の姿＞などのサブテーマが抽出された。Gillard & Allsop<sup>24)</sup>の研究においても“Adult staff”はテーマの一つとして挙げられており、大人のスタッフとキャンパーの相互作用は、キャンプの大きな特徴であることが指摘されている。本研究においても、全ての事例で大人のスタッフとの関わりの意味について語られ、その影響力の大きさが改めて確認された。

### 2-2) 《楽しさ》

《楽しさ》は、キャンプの楽しさについての語りから生成されたテーマで、6事例で共通して抽出された。Gillard & Allsop<sup>24)</sup>の研究においても“Enjoyment”はテーマの一つとして示され、子どもの成長と学びにとって重要な要素であることが主張されている。Gの「(5年生以前のキャンプでは)親元を離れて何日間も、っていうのがすごく嫌だったんだと思う…楽しい思いを僕が出来なかった。(楽しさ



を感じるようになった)小学校5年生以降のキャンプを経験して…リーダーシップっていう部分が、自分の中に出てきた」という語りは、キャンプの《楽しさ》を感じたことが、参加者の成長を促進させていた例であると言える。また、楽しさなどの肯定的な感情を伴う記憶は長く保持されると言われる<sup>32)</sup>ことから、キャンプに対して楽しさを感じることは、長期的な自伝的推論を支える基盤となると考えられる。

### 2-3) 《非日常の場》

《非日常の場》は、キャンプが〈学校外の世界〉であったことや、〈自然環境下での活動〉をするなど、日常生活とは離れた場であったことに意味を見出した語りから生成されたテーマである。特に、普段の学校生活とは違う環境で友人関係を築くことや、「先生」とは異なるカウンセラーやリーダーの存在、学校教育の枠にとらわれない学びなど、キャンプが〈学校外の世界〉であることについて5名(A,B,C,D,E)が触れ、意味づけをしていた。

### 2-4) 《極限状況の体験》

《極限状況の体験》は、〈生死の境を感じる体験〉〈逃げ場がない状況〉など、登山やソロビバークなどのキャンプの冒険教育的な要素に意味づけがされている語りから生成されたテーマである。「葛藤や緊張を含む経験の記憶の方が意味づけされやすい(p.88)」<sup>31)</sup>と言われるように、冒険的なプログラムによって心理的・身体的な負荷を感じた経験は、その後の達成体験とも相まって、時を経ても参加者の記憶に留まり、意味づけされやすいと考えられる。

### 2-5) 《連続参加》

《連続参加》は、キャンプへ継続的に参加することの意味についての語りから生成されたテーマである。B,C,D,E,Gの事例において、キャンプに連続して参加することで、キャンプ経験に対する自伝的推論が促進された過程がみられた。「(自然の見方が)毎年夏になると、

広がっていったり深くなっていったりっていうのを、毎年行くことによって、引き続き考えることが出来た」というEの語り、そして「連続性っていうので…年間で連続して関わられたのがすごく良かった」というCの語りからは、年次を越えて、あるいは年度内で、キャンプに連続して参加したことが、過去のキャンプ経験を振り返るきっかけとなり、キャンプの学びをより強化していたことが伺えた。

### 2-6) 《成功体験》

《成功体験》はキャンプでの成功体験から影響を受けたという語りから生成されたテーマである。Aにとっては仲のいい友人を作ることが出来たという成功体験が、CやE、F、Gにとっては登山やソロビバークなどの困難を乗り越えた成功体験が、BやCにとっては仲間から認められる経験が、自身の変化のきっかけとして意味づけられていた。

### 2-7) 《キャンプ前のモチベーション》

《キャンプ前のモチベーション》は、「自分自身をチャレンジ...という気持ちで取り組んだのが一番大きかった」というCの語りのように、キャンプに参加する前の前向きなモチベーションがキャンプからの学びに影響していたという語りから生成されたテーマである。アウトワード・バウンドにおける体験の要素と学習過程を表す *Outward Bound Process*<sup>33)</sup>のなかでも、学習に向けた第一の要素として学習者の“Motivation”が挙げられているが、キャンプ前に前向きな心理状態であったことがキャンプによる学びを支えていたことについて参加者自身の視点から語られた本研究の結果は、既存の知見を強化するものであると言える。

## 3.3.総合考察

### 3.3.1.記憶の内容と自伝的推論

インタビュー調査協力者は、2名(A,D)がカウンセラーとの交流の場面を、1名(B)が友人との交流の場面を、4名(C,E,F,G)が冒険的な状況の場面を最も印象に残る出来事として挙

げた。冒険的な状況の記憶には、冒険教育プログラムとして計画された場面に限らず、学校キャンプでのナイトハイクで道を間違え、意図せず冒険的な状況になってしまった F の事例、またアクシデントにより冒険的なプログラムがより負荷の高い冒険になってしまった C や E の事例など、想定外に生じた冒険的な状況の記憶が含まれていた。アンケート調査において「指導者との関わりの記憶」、「登山・ハイキング・ソロビバークの記憶」、「達成体験に関する記憶」が高い自伝的推論得点を示していたが、キャンプの記憶について活発な自伝的推論を行っていることを理由に選定されたインタビュー調査協力者が印象的な出来事として挙げた記憶が、冒険的な状況を克服した場面や他者との交流の場面に集中したことはアンケート調査の結果と一致しており、また、「アクティブな出来事」、「達成体験に繋がる出来事」、「対人関係を含む出来事」等の記憶が特に保持されることを主張する Liddicoat<sup>12)</sup>の研究の結果とも一致していた。このように、指導者や仲間とのあたたかな交流の記憶や、冒険的な状況を克服した記憶は、参加者が保持する様々なキャンプ場面の記憶の中でも印象的な出来事として想起されやすく、自伝的推論が促進されやすいと言える。特に、冒険的な状況を克服し達成感を得た記憶は、自然環境下でリスクに向かい、時に「生死の境」(F の事例)だと感じるほどの状況に置かれるという環境的な非日常性や、「精神的にも、結構追いつめられる…逃げ場がない」(G の事例)と語られるほどの日常では経験することの少ない心理的・身体的なストレスを体験する非日常性、加えて達成後のポジティブ感情の強さなど、様々な要因によって強烈な印象を残す記憶として保持されていたことが伺えた。そして、その後の人生で繰り返し想起されるなかで自伝的推論が深まり、時を経ても参加者に大きな影響を与える記憶として保持され続けていると言える。

### 3.3.2. キャンプ経験の意味づけに関する研究との関連

Snider & Farmer<sup>11)</sup>によって示された、子ども時代のキャンプ経験が大人になる上で参加者に与えた影響を表す 4 つのテーマと本研究の結果を比較すると、“Improved Confidence and Independence”(自信と自立心の向上)は《自信の獲得》、“Outdoor Affinity”(野外への親近感)は《自然観》および《野外教育や野外活動に関する態度・技能》、“Life Skills”(ライフスキル)は《社会性の獲得》、“Positive Relationships”(ポジティブな関係性)は《人とのつながり》と内容が一致していた。Snider & Farmer の研究、および本研究のどちらも自伝的推論が進んだ対象を抽出している点で共通していると言え、両者に共通でみられたテーマは、キャンプ参加後年月が経過し、その影響を強く感じている参加者が回顧的にキャンプの効果の意味づけた場合に浮上するキャンプ効果の本質を示すテーマであると言えるだろう。

また、Kyriakopoulos<sup>23)</sup>が大学生を対象にしたアウトドアセラピープログラムの意味について示した 12 テーマのうち、“Raising confidence”(自信を高める)は《自信の獲得》、“Enhancing connection to others”(他者との繋がりを高める)は《人とのつながり》、“Gaining psychological benefits through managing risky situations”(危険な状況をマネジメントすることで心理的な利益を得る)は《極限状況の体験》、“Therapeutic relationship with therapist”(セラピストとの治療的な関係)は《仲間・指導者の存在》とその内容が一致した。そして、Gillard & Allsop<sup>24)</sup>によって示された、重病を患う青年(14-15 歳)にとってのサマーキャンプ経験の意味を表す 8 テーマのうち、“Sense of belonging”(帰属意識)は《人とのつながり》、“Enjoyment”(楽しさ)は《楽しさ》、“Adult staff”(大人のスタッフ)は《仲間・指導者の存

在》、「Personal growth」(個人の成長)は《自信の獲得》、「Escape」(逃避)は《非日常の場》とその内容が一致していた。これらの研究は調査対象や調査時期が本研究とは異なるが、これらに共通するテーマは、参加者の年齢やスペシャルニーズの有無を問わず、キャンプ直後にも、そして時間が経過してからも認められる「キャンプ経験の意味」であると言えるだろう。

### 3.3.3. 自伝的記憶および自伝的推論に関する先行研究との関連

自伝的推論の過程に着目すると、7 事例において、子ども時代の組織キャンプの記憶は、再びキャンプに参加したとき(A,B,C,D,E,G)、異なる価値観に触れたとき(B,E)、困難に直面したとき(E,G)、類似の場面に遭遇したとき(A,B,C,D,E,F,G)、進路選択のとき(C,D,G)など、参加者のその後の人生のそれぞれのタイミングにおいて想起・再解釈されていた。この結果は、「自伝的記憶はその出来事を経験した時と類似した状況で想起され、行動や判断を決めるのに役立つ(p.84)」<sup>1)</sup>、「人生の節目や危機的な状況に直面したり、あるいは自己の判断に迷いが生じた時に、意図的あるいは無意図的に、自らの出発点や基準点となる出来事を想起する(p.159)」<sup>1)</sup>という先行研究の知見と一致している。つまり、自伝的推論が進んだ参加者は、人生の過程で過去の記憶から何らかの行動指針を引き出す必要があるとき、子ども時代のキャンプの記憶を自身へヒントを与えてくれる記憶として想起してきた結果、長期的な影響を受け続けていると言えるだろう。

そして、自伝的記憶が発揮している機能に着目すると、子ども時代のキャンプの記憶は Bluck<sup>13)</sup>が提唱した自伝的記憶の 3 つの機能(自己機能、社会機能、方向づけ機能)を担っていたことが本研究においても確認された。例えば、「自己定義記憶」として保持されている記憶は「自己の連続性や一貫性を支えたり、望

ましい自己像を維持するのに役立つ(p.63)」<sup>29)</sup>という「自己機能」を担うと言え、《自己の核》に関する語りをした B、D、E、G にとってのキャンプの記憶は、それに該当するだろう。

また、B の「今でもその(キャンプの)子らと繋がってて、…その子ども、昔のその体験はすごい大事だったなっていう話は今でもする」という語りからは、キャンプの記憶が「対人関係やコミュニケーションにプラスの影響を及ぼす(p.65)」<sup>29)</sup>という「社会機能」を担っていることが読み取れた。メンバー間に周知のストーリーである共通の経験を話題にすることは、メンバー間のラポール(信頼関係)を促す機能を発揮するとされている。《人とのつながり》は、子ども時代のキャンプの記憶を想起し、語ることで共通の体験をした当時の仲間との関係を深めるという社会機能を表すテーマであると言えるだろう。

そして、現在教師となった A が、子ども時代のキャンプで出会ったカウンセラーをロールモデルにしていると語ったこと、C が登山の記憶をターニングポイントとして語ったこと、D が子ども時代のキャンプで出会ったカウンセラーに憧れ、野外教育の道を志すようになったと語ったことは、キャンプに関する自伝的記憶が「さまざまな判断や行動を方向づける(p.65)」<sup>29)</sup>という「方向づけ機能」の役割を果たしていることを示している。個人的出来事記憶は 4 種(出発点、転換点、基準点、類推)の方向づけ機能を担っていることが指摘されているが、C や D にとってキャンプの記憶は「職業や進路選択のきっかけとなった出来事、あるいは今の自分の信念や態度が誕生した瞬間の記憶(p.67)」<sup>29)</sup>である「出発点」や「転換点」として、A にとっては「態度や価値観あるいは信念に強い影響を与えた出来事の記憶(p.67)」<sup>29)</sup>である「基準点」として保持されていると考えられる。そして、これらの記憶は、自己の連続性や一貫性を示すという点で同時に「自己機能」をも担っていると言え

る。

以上のように、キャンプの記憶は様々な機能を持つ。キャンプ経験には「経験の潜在性」があり、キャンプの教育効果の全容は、キャンプ直後に現れるものだけではないことを、参加者の保護者をはじめ、社会に向けて周知することで、組織キャンプの効果への理解を促進することが出来ると考えられる。

#### 4. 結論

本研究では、子ども時代のキャンプ経験が参加者に与える長期的な影響を明らかにすることを目的とし、子ども時代に組織キャンプへの参加経験をもつ20代から40代の7名を対象にライフストーリーとキャンプの記憶、およびキャンプ経験に関する自伝的推論についてのインタビュー調査を行った。IPA分析の結果、彼らにとってのキャンプ経験の意味は、《自己の核》、《自然観》、《人とのつながり》、《社会性の獲得》、《自信の獲得》、《野外教育や野外活動に関する態度・技能》、《行動力》の自己への影響に関する7テーマ、そして《仲間・指導者の存在》、《楽しさ》、《非日常の場》、《極限状況の体験》、《連続参加》、《成功体験》、《キャンプ前のモチベーション》の自身への影響の元となったキャンプの要因に関する7テーマの計14テーマに集約された。キャンプ参加後年月が経過し、自己の変化に伴ってキャンプ経験の意味づけが変化する場合や、加齢に伴う認知的な発達や新たな語彙の獲得によって自伝的推論が深まる場合、そしてその後の人生で生起する別の出来事とキャンプの記憶が結びつき、過去のキャンプ経験がより大きな意味を持つ場合などがあり、キャンプによる影響はその直後で固定されるものではないことが確認された。

また、今後の課題として、本研究では7事例をもとに検討を行ったが、本研究の知見を組織キャンプに広く適用するには、参加したキャンプのプログラム内容や現在の年齢を考

慮し、より多くの事例を検討する必要があるだろう。年齢等の対象を広げた調査を行うことで、子ども時代のキャンプ経験が人生に与える影響の全体像を捉えることが出来ると考えられる。

#### 引用文献

- 1) 佐藤浩一(2007)：自伝的記憶の構造と機能、新潟大学大学院現代社会文化研究科、博士論文。
- 2) 佐藤浩一(2014)：自伝的推論—概念ならびに評価方法の整理と包括的な枠組みの提案—、群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編、63:129-148。
- 3) Bluck S. & Habermas T.(2010)：The Life Story Schema, Motivation and Emotion, 24(2):121-147.
- 4) 新保淳(2001)：原体験における身体に関わりに関する研究、静岡大学教育学部研究報告:教科教育学篇、32:137-147.
- 5) 中込四郎、奥田愛子(2014)：原風景から見た幼少期の身体経験のもつ意味、澤江幸則・木塚朝博・中込四郎編著、筑波大学「未来の子ども育ち」プロジェクト企画、未来の子どもの育ちの支援のために—人間科学の越境と連携実践③—身体性コンピテンスと未来の子どもの育ち、明石書店、東京、90-116.
- 6) 小田梓、坂本昭裕(2010)：長期冒険キャンプに参加した不登校児の体験の意味づけに関する研究、筑波大学体育科学系紀要、33:227-231.
- 7) 堀出知里、飯田稔(2006)：不登校の子どもを対象としたキャンププログラムの事例研究(4)—キャンプに参加した不登校児の追跡調査—、日本野外教育学会第9回大会プログラム・研究発表抄録集、97.
- 8) 伊原久美子、木谷尚史、佐藤知行(2010)：冒険教育プログラムの参加経験がその後の人生に及ぼす影響、大阪体育大学紀要、



- 41:13-22.
- 9) 高野孝子(2007)：冒険教育プロジェクトの長期的な影響:20 から 23 年前のオペレーション・ローリーが与えた参加者へのインパクト、日本野外教育学会第 10 回大会プログラム・研究発表抄録集、62-63.
- 10)野田恵、辻英之(2009)：山村留学生へのライフストーリー研究の試み:自然体験学習が人生に与える影響について、自然体験学習実践研究、1(2):97-117.
- 11)Snider C. L. & Farmer J. R.(2016)：Impacts of a Southern Indiana Summer Camp: Adult Reflections on Childhood Experiences, *Journal of Youth Development*, 11(3):175-187.
- 12)Liddicoat K.R.(2013)：Memories and lasting impacts of residential outdoor environmental education programs, Doctoral dissertation, Cornell University.
- 13)Bluck S.(2003)：Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life, *Memory*, 11:113-123.
- 14)Cummings J.P.(2009)：A Longitudinal Study of the Outcomes from Participation in Wilderness Adventure Education Programs, Master's Thesis, California Polytechnic State University.
- 15)Gass M.A. & Garvey D.E.& Sugerman D.A.(2003)：The Long-Term Effects of a First-Year Student Wilderness Orientation Program, *Journal of Experiential Education*, 26(1):34-40.
- 16)佐藤冬果、井村仁(2018)：子ども時代の組織キャンプ経験に関する自伝的記憶：記憶特性質問紙を用いた検討、*野外教育研究*、21(2):15-26.
- 17)調査対象である「記憶」は多岐に渡るため、先行研究ではそれぞれの研究目的に合致した記憶特性項目を抽出し調査を行っている。標準化された尺度や得点が確立されていない記憶特性を統計的に評価する方法として、リッカート・スケール上の評定中間値を検定値とした 1 標本 t 検定が多く用いられている。
- 18)寺中祥吾(2010)：長期冒険キャンプにおけるグループプロセスと個人変容との関連の検討－自尊感情に及ぼすグループの影響に注目して－、筑波大学大学院人間総合科学研究科修士論文。
- 19)Smith J.A. & Osborn M.(2003)：Interpretative phenomenological analysis., In J.A. Smith (Ed.), *Qualitative Psychology: A Practical Guide to Research Methods.*, SAGE Publications Ltd., 53-80.
- 20)伊賀光屋(2014):解釈的現象学的分析(IPA)の方法論、新潟大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編、6(2):169-192.
- 21)ラングドリッジ・ダレン (著)、田中彰吾、渡辺恒夫、植田嘉好子(訳)(2016)：現象学的心理学への招待:理論から具体的技法まで、新曜社、東京、149-180.
- 22)神戸早紀、末武康弘(2011)：質的研究法としての解釈学的現象学的分析(IPA)の具体的な手続きについて－「解釈学的現象学的分析」(Smith & Osborn,2004)より－、*神奈川大学心理相談センター紀要 心理相談研究*、2:119-132.
- 23)Kyriakopoulos A.(2011)：How individuals with self-reported anxiety and depression experienced a combination of individual counselling with an adventurous outdoor experience: A qualitative evaluation, *Counselling and Psychotherapy Research*, 11(2):120-128.
- 24)Gillard A. & Allsop J.(2016)：Camp experiences in the lives of adolescents with serious illnesses, *Children and*

- Youth Services Review, 65:112-119.
- 25)Hickman M. & Stokes P.(2016) : Sights and insights: Vocational outdoor students' learning through and about reflective practice in the workplace, *Journal of Outdoor and Environmental Education*, 19(1):22-32.
- 26)Willig C.(著)、上淵寿、小松孝至、大家まゆみ(訳)(2003) : 心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて、培風館、東京、70-95.
- 27)Pillemer D.B.(2003) : Directive functions of autobiographical memory: the guiding power of the specific episode, *Memory*, 11(2):193-202.
- 28)Singer J.A. & Salovey P.(1993) : *The Remembered Self: Emotion and Memory in Personality*, The Free Press, New York.
- 29)佐藤浩一(2008) : 自伝的記憶の機能、佐藤浩一、下島裕美、越智啓太編、自伝的記憶の心理学、北大路書房、京都、60-75.
- 30)McLean K.C. & Fournier M.A.(2008) : The content and processes of autobiographical reasoning in narrative identity, *Journal of Research in Personality*, 42:527-545.
- 31)星野敏男(2006) : キャンプと教育的効果、公益社団法人日本キャンプ協会指導者養成委員会(編)、キャンプディレクター必携: キャンプディレクター養成テキスト、公益社団法人日本キャンプ協会、東京、7-8.
- 32)清水寛之、湯浅万紀子(2012) : 記憶特性質問紙(MCQ)を用いた科学館体験の長期記憶に関する検討:科学館職員、大学生、および高齢者の比較、*科学技術コミュニケーション*、12:19-30.
- 33)Walsh V. & Golins G.L.(1976) : *The exploration of the Outward Bound process*, Colorado Outward Bound School , Denver.

(平成 29 年 7 月 19 日 受付)

(平成 30 年 4 月 20 日 受理)